

につゝけし物也と、こは古意也、さか木の八十玉ぐしに對へる、野すゝの八十玉串は小竹なるべきもの也。集中の神まつりの歌に、竹玉を繁に貫垂とよめるも、此玉ぐ

篠は玄のめ竹の類にて、いとちいさくて、色黒き竹なり、それを阿波土佐などの國にては須々と云といへり、東國の山邊にては、笑竹をも玄かいふもの、あれど、猶別也、後世の歌に、吉野の嶽にすゝ分てとよめるも、かの野篠也、旅人のすゝのしのや、さゝのへるもおもひ合すべし。

〔倭訓采前編十二〕すゝ○中 小竹の類をすゝといふは涼しき意にや、吉野の嶽にすゝ分てとも、大たけのすゝ吹風にともすゝの下道ともよめる是也、神代紀に五百箇野薦といへるも此物成べしともいへり、或説に薦は篠の誤り、篠は黒き小竹也とぞ、鈴竹の筍をすゝといひしは、風雅集中、たかむなのはそきを奉られて、是はすゝか竹かいづれと見わきてと見え、古今著聞に石泉法印鞍馬の別當にて、彼よりすゝを多くまうけたるを、或人の許へ遣すとて、

此すゝは鞍馬の福にてさむらふにさればとて又むかでめさるな筍の皮をむかぬを蜈蚣に寄ていへり、蜈蚣は鞍馬の福といひならへり。

〔古今要覽稿草木〕すゝ

やまとけ。

すゞ、一名みすゞ、一名すゞたけ、一名やのたけ、一名やま竹は、漢名を箸箭といひ、筍をすゞだけのこ、漢名を篠、一名箭筈といふ、これは雪國の山に生ずる小竹にして、信濃に多し、小苑その葉筍に似て、幹高く、本根屈曲すと本草家言一いへり、また加賀越前等に産するものは、その葉筍よりも至て長大にして、葉邊變白せず、幹は矢竹に似て、每節平かにして、高さ一丈許大さ指の如し、また肥前の大村よりいづるものは、その節間殊に長し、和漢圖會三即一物なり、歌には大和の吉野、山城の鞍馬、紀伊の熊野等の諸山のもの其名高し、されど太古の時、五百箇野篠と日本書紀いへるは、山生のものにあらず、此筍籜青綠にして、その籜枯るときは色白し、すべて北國地方にては、大竹稀なるを以